茨城高等学校・中学校

校長室だより　２０２６年１１月２４日

愛と幻想のミステリー/超個人的「このミス」vol ２

２022年秋、校長室だよりで、「秋の夜長はミステリー/超個人的『このミス』を開催します」という文章を書きました。「このミス」、正式名称「このミステリーがすごい」は、宝島社が毎年実施しているミステリー小説の年間人気ランキングです。2022年の校長室だよりでは、これを真似して「超個人的『このミス』」と題し、筆者が読み散らしてきたあまたのミステリー小説の中から、「これは」と感じた作品を生徒諸君に紹介させていただきました。そして月日は流れ、あれから4年･･･皆さま、お待たせしました！（待ってない？）ついに満を持(じ)して、超個人的「このミス」第二弾をお届けするときがやってきたのです！（パチパチパチ）

前回も書きましたが、筆者はミステリー小説が好きで、「ライトなミステリーファン」を自認しています。これまた前回も言いましたが、なぜわざわざ「ライトな」と断りを入れるかというと、世の中には次々と刊行されるミステリー本というミステリー本を読みまくっている、ミステリードランカーみたいなヘビーなファンがいて（いるんじゃないかと思われて）、うっかり「私、ミステリーファンです」などと口走ろうものなら、「〇〇（作品名）も読まずして、ミステリーファンを名乗るなかれ！くわあーつ！！」と怒られるに違いないからです。そんなわけなので今回の校長室だよりは、「アタクシ、はなはだ未熟者ではございますが、少々ミステリー小説の方を･･･まあその、時々アレさせていただいております。至らない点も多々あることと思いますが、どうか広いお心ご容赦(ようしゃ)いただけますようお願いいたしますです、･･･はい（もみ手）」という超低姿勢で臨んでいきたいと思います。

今回は、前回（2022年秋）以降に筆者が読んだミステリーの中から 7 作品を選抜しました。（2022年以降の刊行とは限らない。）「愛と幻想のミステリー」というタイトルは、先日亡くなった村上龍さんの小説『愛と幻想のファシズム』をオマージュさせていただきました。それでは秋の夜長、豊潤(ほうじゅん)なミステリーの世界を一緒に堪能(たんのう)していきましょう。

『木曜殺人クラブ』　リチャード・オスマン（ハヤカワ文庫）

最初に本のタイトルを見て、「え？毎週木曜日になると人を殺しまくる、ちょっと（かなり）ヤバい人たちのサークル活動の話？」と思って読み始めたら、全然違いました。『木曜殺人クラブ』は、エネルギッシュでかわいらしくて、人生経験と機知に富み、友情や、時には打算によって結ばれ、さまざまな秘密を抱えた、素敵な老人たちのお話でした。

物語の舞台は、イギリス北西部の港町フェア・ヘイブン郊外の田園地帯にある、“イギリス初の高級リタイアメント・ビレッジ”「クーパーズ・チェイス」。ここには70歳代から80歳代の、現役をリタイアした数十名の老人たちが余生を過ごしています。日本のいわゆる老人ホームとは違って、そこは老人たちの生活の場であると同時に、フランス語を学んだり、ズンバを踊ったりする社交

場でもあります。老人たちによる自治管理も盛んで、さまざまな「委員会」や「クラブ」が結成され活発に活動しています。

そんなクラブの一つが「木曜殺人クラブ」です。かつて「赤いロン」と呼ばれ、イギリス中の企業経営者を震え上がらせた労働運動のリーダー、ロン・リッチー、冷静で理屈っぽい元精神科医のイブラヒム、オフィスに飛行機の翼で作ったテーブルがある「なんとかいう」企業で娘のジョアンナが働いている元看護師のジョイス、そして、過去の経歴一切を明かさない謎の人物、明晰な知性と予測不能な行動力でクラブのリーダー的存在となっているエリザベスの四人によって組織されています。ちなみにロンとイブラヒムは男性、ジョイスとエリザベスは女性です。彼らは、毎週木曜日に〝ジグソー・ルーム〟に集まり、過去に起きた未解決の殺人事件のファイルを調査し、真犯人を推理しているのです。

しかし、そんなアマチュアの老人たちが、どうして殺人事件の資料など手に入れることができたのか？実は「木曜殺人クラブ」は当初、エリザベスとエリザベスの親友で元女性警部だったペニーの二人によって創設されました。警察官時代、優秀な刑事だったペニーは、「女性だから」という理由で十分な活躍の場を与えられませんでした。警察を退職する際、ペニーは極秘裏に未解決事件のファイルをコピーして持ち出しました。自分が関与できなかったり、意見を取り上げてもらえなかった事件を再調査し、真相を暴き出すためです。しかし、警察ではないペニーやエリザベスは、真犯人が分かったからといって、彼らを捕まえたり、世間に公表したりすることはできません。あくまで仲間うちの趣味、知的ゲームとして難事件の解決を行うのが「木曜殺人クラブ」なのです。その後、重度の認知症を患い植物人間状態となったペニーは、現在は心電図の電極や栄養補給の管を取り付けられ、元獣医の夫ジョンに見守られながら看護棟のベッドに横たわっています。

そんなある日、「木曜殺人クラブ」メンバーのすぐ身近で、本物の殺人が起こります。クーパーズ・チェイスの経営者、イアン・ヴェンサムは、さらなる富を手にするために施設の拡張を計画していました。そのためには、共同経営者のトニー・カランをクビにする必要があります。クーパーズ・チェイスで行われた入居者たちへの施設拡張計画説明会の会場で、激怒したトニーがイアンと口論する場面を、ロンやジョイスが目撃します。イアンは「自分はトニーに殺されるかもしれない」と不安を覚えます。しかし口論の直後、自宅で何ものかに撲殺されたのは、イアンではなくトニーのほうでした。

こんな絶好の機会を「木曜殺人クラブ」のメンバーが見逃すはずはありません。エリザベスとジョイスは、ひったくり事件の被害者を装い、フェア・ヘイブン警察署を訪れます。そして、別れた元カレとの思い出から逃れるためロンドンからフェア・ヘイブン署に転勤し、あまりの刺激のなさに転勤したことを後悔している女性警察官のドナ・フレイタスを言葉巧みに仲間に引き込み、〝本物の〟殺人事件の調査に乗り出すのです。

しかし、そんなエリザベスたちを横目に、クーパーズ・チェイスでは、第二の殺人事件が起こります。衆人環視の中で誰かがひそかに、イアン・ヴェンサムに薬物を注射して殺害したのです。「木曜殺人クラブ」の四人とドナ、そしてドナの上司のクリス主任警部は、協力したり、協力しなかったりしながら、二つの殺人事件に挑んでいくというお話です。

『木曜殺人クラブ』の魅力は、ストーリーのおもしろさもさることながら、何と言っても〝キャラの立った〟登場人物たちだと思います。熱血で単純だけれど憎めないロン、巧みな話術と行動力で次々と問題を打開していくエリザベス、人はいいけれどちょっと変わり者のイブラヒム、エリザベ

スたちに振り回されながら、いつか老人たちにシンパシーを感じていくドナ、刑事としては一流だが、増え続ける体重を管理できない自分に自信を持てない中年独身男クリスなど、魅力的な登場人物たちのオンパレードの中で一番を選ぶとしたら、筆者の推しは元看護師のジョイスです。

70 歳を過ぎ、夫を亡くしたジョイスは、娘のジョアンナと離れてクーパーズ・チェイスで暮らしています。ジョイスは、「木曜殺人クラブ」の一員として活動する一方で、亡妻との思い出に生きる元教授のバーナードに恋をしており、彼のためにケーキを焼くという“乙女な”一面も持っています。『木曜殺人クラブ』は 115 の章から成り立っていますが、その中に「ジョイス」という章が 23 あります。それらは主にジョイスが日記を付けているという態(てい)で、ジョイス目線の一人称で書かれるのですが、それが何とも言えずユーモラスで、天真爛漫(てんしんらんまん)で、それでいてちょっぴり毒も含んでいて、作品を読んだ人は皆、ジョイスという老婦人を好きにならずにいられないと思います。ジョイスの魅力をもっと具体的に説明したいところですが、長くなりそうなのでやめます。興味のある人は、ぜひ自分で『木曜殺人クラブ』を読んでみてください。

ミステリー初心者も読みやすく、目の肥えたミステリーファンも納得の作品だと思います。もしも誰かに、「最近のミステリーで、オススメってありますか？」と聞かれたら、自分はおそらく「とりあえず『木曜殺人クラブ』読んでみたら？」と答えるかもしれません。

『自由研究には向かない殺人』　ホリー・ジャクソン（創元推理文庫）

この本を読んだのは、ある知人から「 Amazon で注文したら、間違って同じ本を何冊も買ってしまったので、一冊買い取ってもらえませんか？」と頼まれたのがきっかけです。ちなみにこの人は、以前にも別のミステリー本を複数冊買ってしまって、筆者が買い取ってあげたことがあります。筆者のミステリー好きを知っていて頼んでくるようですが、まあ、前回買い取った本も、この『自由研究には向かない殺人』もおもしろかったからいいようなものの、今後ネットで本を買うときには、しっかりと冊数を確認し、それから「購入する」をクリックしていただくよう、切(せつ)にお願いしたい。

『自由研究には向かない殺人』の主人公、ピッパ・フィッツ＝アモービは、グラマースクールの最上級生で、17歳の女の子です。グラマースクールというのがよくわからなかったので調べてみたら、「イギリスの公立中等学校。一般の公立中等学校とは異なり、アカデミックなレベルが高く、難関大学への進学率が高い。日本で言う公立進学高、または公立進学中高一貫校」のように説明されていました。

グラマースクールでは最上級学年の夏休みに、 EPQ （エクステンディッド・プロジェクト・クオリフィケーション）という高校卒業資格および大学受験資格取得のための自由研究が課せられます。研究の題材はなんでも好きなものを選んでかまいません。そこでピッパが選んだテーマは、5年前、現在自分が通うグラマースクールの生徒が殺された殺人事件でした。

ピッパが暮らすリトル・キルトンは、イギリスの小さな田舎町です。実のお父さんはピッパが幼いときに亡くなり、不動産会社に勤務するお母さんのリアン、お母さんが再婚した、弁護士でナイジェリア人のお父さんヴィクター、ヴィクターの連れ子の弟ジョシュア、ゴールデン・レトリバーのバーニーがピッパの家族です。血のつながらない、肌の色も違う父と娘、姉と弟ですが、ピッパとヴィクター、ジョシュアは本当の親子、姉弟のようにふざけあったり、ときにはケンカしたり、深い

愛情と信頼で結ばれています。

ピッパは、ごく普通の･･･とはちょっと言いにくい、やや頑固で、かなり正義感が強く、極めてアクティブな女の子です。一方で、家では「オタクなら熱く語れ！」とプリントされただるだるのTシャツを部屋着にして、ボーイフレンドと別れた女友達が落ち込んで部屋に閉じこもっていると聞けば、友人と激励隊を組織し、お菓子と箱ティッシュ（涙をふくため）を持って出かけていくなど、イマドキな女子高生でもあります。

リトル・キルトンの人々に衝撃をもたらした5年前の殺人事件の被害者は、アンディ・ベルという17歳の少女です。アンディは、4月20日金曜日の夜0時45分、パーティー帰りの両親を車で迎えに行くはずでしたが、姿を見せず、そのまま行方不明となりました。アンディには、サル・シンという、同級生のボーイフレンドがいました。翌土曜日、警察はサルに接触し、アンディが最後に目撃された金曜の午後10時40分以降から土曜の午前0時45分までの行動を尋ね、サルは、友人のマックス宅で行われていた週末パーティーに参加していたと答えます。パーティーの参加者は、マックス、サル、ピッパの親友サリーの姉のナオミなど5名のグラマースクールの生徒たちでした。サルは当初、午前0時15分ごろマックスの家を出て徒歩で帰宅した、と話していましたが、後から、サルがマックス宅を出たのは実は午後10時30分ごろだったことが分かります。さらにサルは、自分が帰ったのは午前0時15分だったと警察に答えてほしいと、パーティに参加した友人たちに依頼していたことが明らかになるのです。

火曜日、アンディを探していた警察の捜索チームが森で遺体を発見します。それは、アンディではなくサルの遺体でした。サルは大量の睡眠薬を飲んでいました。翌日水曜日には、アンディの車が発見され、アンディの血痕（けっこん）とともにサルの指紋（しもん）も検出されます。さらに、サルがアンディの携帯電話を所持しており、サルの指にアンディの血痕が付着していたことが分かるにおよんで、何らかの事情でサルがアンディを殺害し、その後自殺したことはほぼ間違いないとマスコミも町の住人たちも考えるようになりました。しかし、それらを裏付ける決定的な証拠となるアンディの遺体はどこからも発見されなかったのです。

ピッパは生前のサルを知っていました。まだ、グラマースクールの低学年だったころ、ピッパは肌の色の違う弟ジョシュアのことで同級生からいじめられていました。そんな同級生たちに「いじめを続けるつもりなら、この学校にはもう通えなくなるよ」と言っていじめをやめさせ、ピッパを助けてくれたのが上級生のサルでした。

夏休み、ピッパは意を決して、人々が寄りつかなくなって久しい「殺人犯」サルの家族が住む家のチャイムを押します。ドアから顔をのぞかせたのは、サルにそっくりの弟ラヴィでした。EPQの自由研究のため5年前の事件についてインタビューをさせてほしいと聞かされ、怒り爆発寸前の表情になったラヴィにピッパは続けます。「わたし、あなたのお兄さんがやったと思っていないから。それを証明しようと思うの」

この作品の魅力は何かと言ったら、まずは主人公のピッパという女の子のキャラクターでしょう。明るくて、まっすぐで、ロジカルな思考力と圧倒的な行動力を持ったピッパは、ときには失敗して落ち込んだり、人間関係に葛藤（かっとう）したりもする、生き生きとした、等身大のティーンエイジャーとして描かれています。「殺人事件の真犯人の推理」という研究目的を果たすため、ピッパがとった手法は、さまざまなソーシャルメディアの検証と、リトル・キルトン近郊で今も生活している複数の関係者たちへのインタビューでした。警察の行方不明者捜索班のアンジェラ、ラヴィ、自宅で週

末パーティーを開いたマックス、アンディの親友だったクロエとエマ、ピッパの親友サリーの姉で週末パーティーに参加していたナオミ、ナオミとサリーの父親でグラマースクールの歴史教師エリオットなど複数の人びとにインタビューし、スマホやSNSなどデジタルツールを駆使して事件の真相を追及していく中で、ある人物の関与の可能性が浮かび上がってきます。しかしそれは、ピッパにとっては信じられない、信じたくない事実だったのです。

『ハヤブサ消防団』　池井戸　潤（集英社文庫）

30 歳で、そこそこ大きな文学賞を受賞したミステリー作家、三馬太郎（みまたろう）は、その後ヒット作に恵まれず、東京での生活に疲れをおぼえ、中部地方U県S郡八百万（やおろず）町の高台に位置するハヤブサ地区にある、かつて亡き父が住んでいた古ぼけた大きな家、山桜の大木があることから「桜屋敷」と地域で呼ばれる家に移住する、というところから物語は始まります。

田舎暮らしは初体験の太郎でしたが、太郎の父を知る土地の人たちは「勝夫さんとこの息子さん」として太郎を受け入れてくれます。引っ越してひと月が過ぎたころ、初めて出席した自治体の寄り合いの後、太郎は同年代の藤本勘介に誘われて、地域に一軒だけの居酒屋、「居酒屋△（さんかく）」を訪れます。そこには、分団長の宮原郁夫、副分団長の森野洋輔、団員の徳田省吾、中西陽太らが待ち構えており、彼らから熱烈なオファーを受けた太郎は、お酒でやや気が大きくなっていたこともあり、八百万町消防団ハヤブサ分団、通称ハヤブサ消防団に入団することを承諾してしまうのでした。

消防団とは、いわゆる消防署とは異なります。消防署には、消防、救急の専門知識と技術を有する消防士が 24 時間、交代で勤務しており、 119 番通報を受けるとすぐに現場へと急行します。これに対して消防団は、普段は別の仕事をしている地域住民によって構成されていて、いざ火災や災害が発生すると、消防団員たちは自宅や職場から現場へ駆けつけます。防火パトロール、イベントの警備、行方不明者の捜索などを行うこともあります。大きな消防署が近くにない山間部などでは、災害の初期対応において消防団は大いに力を発揮するのです。

消防団の一員となった太郎は、徐々に地域の人びとや土地の習慣になじんでいきます。最初の事件は、そんな太郎たち新入団員の入団式の最中に起こります。八百万小学校の校庭に 500 人あまりの消防団関係者が集まって式典が進行する中、「ハヤブサ地区で火災発生」の第一報が入ります。分団長、宮原の号令のもと、太郎たちハヤブサ消防団の面々は式典そっちのけで消防車に飛び乗り、火災現場に向かいます。火元は、ハヤブサ地区で工場を経営する江島波夫の住宅でした。消防団が到着したときには、納屋はすでに焼け落ち、母屋も半分以上が火に包まれている状態でした。逃げ遅れたお婆さんが取り残されていると聞いた宮原は、躊躇（ちゅうちょ）なく炎の中に飛び込み、無事お婆さんを救助します。しかし消防団の奮闘むなしく、江島宅は全焼してしまいます。

その後、太郎は宮原たちから、工場経営が赤字に陥（おちい）った江島波夫が広範囲の山や畑を太陽光発電業者に売却していたこと、それによって生活環境が損なわれた多くの人びとが不満を持ち、村の問題児、山原浩信などは江島波夫の家に直接怒鳴り込んでいたこと、江島波夫の家から火が出る少し前、山原浩信が江島波夫の家の方から歩いてくるのを目撃した人がいたことなどを聞かされます。その数日後、山原浩信は山中に停めた車の中に財布や携帯電話を残したまま行方不明となります。そして捜索に出た太郎たちハヤブサ消防団によって、山中の滝の淵（ふち）から

遺体となって発見されるのです。

その後もハヤブサ地区には、連続放火を疑わせる不審火が相次ぎます。ハヤブサ消防団の重鎮的存在で、事件に関して何らかの事情を知っていることをうかがわせる林業会社経営の山原賢作、太郎が脚本を担当する「ハヤブサ地区町おこし動画」の映像クリエーターを務める謎の美女、立木彩など、さまざまな人物が登場し、その複雑な関係が明らかになっていく中で、「スーパーナチュラル」な集落、ハヤブサを舞台とした物語は思いもかけない展開をみせていくのです。

『ハヤブサ消防団』を読んでいて、自分は、「八つ墓村」や「悪魔の手毬唄」など横溝正史作品に似た雰囲気を感じました。もちろん、不気味でおどろおどろしい横溝作品と、ユーモラスなテイストもあり、エンタメ要素の強い『ハヤブサ消防団』では、作品のトーンは全然違うけれど、社会から隔たった小さな山村を舞台に、そこに生きる人びとのしがらみや秘密、愛憎を描く物語は、やはり横溝作品に似ているなあ、三馬太郎のモデルは、実は金田一耕助なんじゃないかなあ？などと考えながら読んでいました。（個人の感想です。反論は募集していません）

余談ですが、作品中に登場する食べ物がおいしそうなのも、この小説の魅力の一つです。雑誌編集者の中山田が悶絶した、蒸さないで焼く「関西風うな丼」、ハヤブサ地区住民の親睦（しんぼく）の場「居酒屋△」で出される、「豚（とん）チャン」のニワトリ版で鶏肉を甘辛く焼いた「鶏（けい）チャン」、勘介が「絶品」と太鼓判を押す「アブラゲ」、･･･一度食べてみたいなあ。

『異常（アノマリー）』　エルヴェ・ル・テリエ（ハヤカワ epi 文庫）

７歳の少女ソフィアは、アメリカミドリヒキガエルのベティをかわいがっていました。苔（こけ）や草を入れた飼育ケースに椰子（やし）の実の殻で池を作り、学校から帰ると活きのいいハエを与えて大切に飼っていました。ところが3ヶ月前、ベティは飼育ケースから脱走し行方不明になってしまいます。そして今日、キッチンのラジエーターの裏で干からびたベティが発見されたのです。兄のリアンは、「カエルが死んだ」と意地悪くはやし立て、ソフィアは泣き出してしまいます。二人の母親のエイプリルは、寝ている父親を起こしてしまうから騒がないように、と注意しますが、騒ぎを聞きつけて父親クラークが二階から下りてきます。アメリカ陸軍に属しアフガニスタンに派兵中のクラークは、自分が休暇で帰っているときぐらい静かにするよう“ガキども”に言い含められないのか、と乱暴な口調でエイプリルをなじります。エイプリルは、かつて優しく繊細（せんさい）だったクラークは、軍隊ですっかり変わってしまったと感じています。さらに子どもたちに汚いことばをつかったクラークをエイプリルが注意すると、クラークは激怒し、エイプリルにリアムを連れて“むかつく買い物とやら”に行ってこいと怒鳴りつけます。二人が出かけると、それまでの騒ぎを聞いていたかのように玄関のチャイムが鳴ります。訪問者は、連邦捜査局FBIのチャップマン捜査官と名乗ります。チャップマンは父親の暴力からソフィーを救い、母親とともに彼女をある場所へと連れて行くのです。

『異常（アノマリー）』はなんとも奇妙な小説です。冒頭から、互いに無関係な人びとの物語が、何の一貫性もなく、それぞれの独立したストーリーとして淡々と語られていきます。上で紹介したエイプリルとソフィー母娘（おやこ）、人気レストランを経営する家族思いの父親と冷酷非情なすご腕の殺し屋の二つの顔を使い分けるブレイク、『異常（アノマリー）』と名付けた作品の末尾に「私はみずからの生に終止符を打つのではなく、不滅に命を与えるのだ」と記し、投身自殺する小説家ヴィクトル・ミゼル、一人息子

のルイを育てるシングルマザーで、ひと時アンドレと恋に落ちるものの、今ではその気持ちが冷めてしまった映像編集者のリュシー、20歳も年下のリュシーに恋し、二人の関係が終わったあともリュシーを思い続ける建築家アンドレ、末期癌を宣告され、絶望のうちに死を待つだけの日々を送る旅客機パイロットのデイヴィッド、弁護士のジョアンナ、歌手のスリムボーイなど、決して重なりあうことのない人びとの物語が、何の脈絡もないまま次々と語り続けられていくのです。物語の登場人物たちは、それぞれの人生において何らかの問題を抱え、痛みや悲しみ、怒りとともに生きています。つけ加えるなら、それらの物語には皆どこかに、不協和音のような奇妙なひずみが存在しています。ソフィーの物語にしても、親による児童虐待案件に、重大犯罪の捜査を担当するFBIが関与してくることなど、普通に考えたらありえないことです。

全く無関係に見えた登場人物たちには、実はたった一つだけ共通点がありました。それは彼ら全員が、2021年3月10日に、パリ発ニューヨーク行きエールフランス006便に乗り合わせていた、という事実です。エールフランス006便ボーイング787型機は、カナダ・ノバスコシア州上空で予報にはなかった直径数百キロ、高度4万5千フィート（約13キロメートル）という超巨大積乱雲に遭遇します。高度3万9千フィートからニューヨークに向けて降下を開始しようとしていたボーイングにこの雲を迂回（うかい）する術（すべ）はありませんでした。突入を決意したマークス機長は、機内放送で、非情に大きな乱気流を通過するためシートベルトを締めるよう乗客に伝え、巨大な雲の壁に機首を向けます。積乱雲に突入した飛行機はジェットコースターのような急降下と急上昇を繰り返します。が、約5分後、突如としてまぶしい太陽に照らされます。同時に機体は正常に安定し、静寂が戻り、墜落の恐怖に怯（おび）えていた乗客たちは、ほっと胸をなで下ろしました。飛行機は無事、積乱雲を通過したのです。しかし不思議なことに、あれだけ派手に落下し続けたというのに、操縦席（コクピット）の高度計は、突入前と変わらぬ3万9千フィートを示していたのでした。

ミステリーの中には、作品全体が読者をミスリードする巨大なトラップのような作りをしているものがあります。この『異常（アノマリー）』という小説は、まさにそうした作品の典型だと思います。本文全体で483ページの小説ですが、筆者は180ページくらいまで読み進んだところで、「あ、やられた」と思いました。登場人物たちの一見バラバラにみえた個々の物語は、実は一つの大きな物語の一部だったのです。しかし驚きは、それだけでは済みませんでした。確率論研究者エイドリアンと位相幾何学研究者メレディスの登場、究極の異常事態発生時の対応マニュアル「プロトコル42」の発動を経て、物語は驚愕（きょうがく）の展開をみせていきます。

そう、まさに「驚愕」という言葉がこの作品を説明するのにぴったりの表現だと思います。読み終わった後、しばらく呆然として、「こんなのあり？」と心の中でつぶやきました。個人的には、「知的なおもしろさを堪能（たんのう）させてくれるミステリー部門」で過去イチをつけたいと思います。「もう普通のミステリーじゃ、満足できないの」という、こじらせ系ミステリー中毒のキミに大、大お勧めします。だまされたと思って一度読んでみてください。

<u>『クスノキの番人』　東野　圭吾（実業之日本社文庫）</u>

映画化もされた大ベストセラーなので、「お、読んだことあるぞ」という生徒諸君も多いかもしれません。

早くに母を亡くした直井玲斗（なおいれいと）は祖母の手で育てられました。玲斗に父親はいません。工業高校

を卒業した後、職を転々とし、最後に務めた職場を解雇された際、支払われなかった退職金代わりに機械を盗み出そうとして、玲斗は逮捕されます。刑務所行きを覚悟していた玲斗でしたが、ある日、接見にやってきた弁護士が「釈放後に命令に従うことを約束するなら釈放の手続を進める」という依頼人からのメッセージを玲斗に伝えます。否応なくその条件を受け入れた玲斗を待っていたのは、亡くなった母の異母姉を名乗る柳澤千舟という六十歳を過ぎた上品な女性でした。ホテル事業を手広く手がける柳澤グループ、ヤナッツコーポレーションの顧問を務める千舟は、「クスノキの番人をしてもらいたい」と玲斗に告げるのでした。

ひと言でミステリーといっても色々なタイプがあります。一番多いのは殺人事件を題材にしたものでしょう。連続殺人事件を扱った小説では、一作品で 5 人も 10 人も人が殺されるようなことも珍しくありません。しかし、この『クスノキの番人』では、殺人は一件も起こらず、誰ひとり死にません。この小説が描いているのは、古い一本のクスノキにまつわる伝説とそれをめぐる人間たちの物語です。

月郷神社は古くから柳澤一族によって守られ、管理されてきました。その境内に立つ巨大なクスノキには、ある伝説があります。クスノキの幹には大人が入れるサイズの空洞があり、その中で祈ると願い事がかなう、と言い伝えられているのです。近年では一種のパワースポットとして知られるようになり、遠方からわざわざやって来る参拝客もいます。しかし、クスノキに願いを届ける正式なやり方は、実は夜に参拝することでした。その参拝を千舟は「祈念」と呼んでいます。祈念を行う人は一人だけで、マッチと特別なロウソクを持ってクスノキの空洞に入ります。そこでロウソク一本が燃え尽きるまでの間、祈念を行うのです。そして、そのクスノキを管理し、祈念の準備を整えるのが「クスノキの番人」の役目です。玲斗は千舟のことばに従い、クスノキの番人となることを承諾します。

クスノキにはさまざまな人たちが訪れます。千舟はもちろん、千舟に紹介され祈念を行うようになった佐治寿明、夜こそこそと出かける寿明の浮気を疑い、父を尾行してきた娘の優美、菓子問屋「たくみや本舗」の跡取り息子の大場壮貴、いやがる壮貴をクスノキに連れてきて祈念をさせる専務の福田など、多くの人たちとの関わりの中で、玲斗はいつのまにかクスノキの番人という立場と責任を受け入れていきます。そして番人を続ける中で、玲斗は少しずつ、祈念に隠されたクスノキの秘密の存在に気づいていくのです。

高校の教師だった千舟の父は、千舟の母が病死した後、 20 歳以上も年下の教え子と再婚します。その後妻の女性が産んだ子どもが、玲斗の母、美千恵でした。若かりしころの千舟は、父の再婚、年の離れた妹の誕生といったできごとを素直に受けとめることができませんでした。やがて美千恵は成長し、銀座のクラブに勤めるようになります。そこで知り合った妻子ある男性との間に生まれたのが玲斗です。しかし美千恵は、乳癌を患い、小学生の玲斗を残して亡くなります。一方で、クスノキの番人を長く務めてきた千舟は、老年にさしかかった自分の年齢を考え、後継者を探していました。クスノキの番人を託す人物は、柳澤家との血縁が深いことが条件となります。しかし、生涯独身だった千舟には自分の子はいません。そこで白羽の矢が立ったのが、異母妹の美千恵が残した子ども、会ったこともない甥の玲斗だったのです。

『クスノキの番人』の基調に流れているのは家族の物語です。玲斗、千舟、佐治寿明、優美、大場壮貴など、それぞれの登場人物が、それぞれの家族の歴史の中で、愛憎や後悔をかかえて生きています。クスノキの秘密は、そんな家族のきずなに光をあて、思いを未来に託す「バト

ン」としての役割を担っていたのです。

読み終わったとき、胸の奥がじんっと熱くなった作品でした。小説を書いた東野圭吾さんは、今年の 7 月、68 歳で亡くなりました。自分は、特に熱心な東野さんの読者というわけではありませんでしたが、『白夜行』『容疑者Xの献身』『手紙』などの話題作はひととおり読んできました。緻密な物語の骨組み、読者をひきこむ語り口が魅力のミステリー作家だったと思います。稀代のストーリーテラーがまた一人、天に召されていきました。東野さんのご冥福をお祈りいたします。

『ストーンサークルの殺人』　M・W・クレイブン（ハヤカワ文庫）

ミステリーの代表的なジャンルの一つに警察小説があります。文字通り、警官や刑事が主人公となって活躍し、事件を解決していく話です。そしてけっこうな割合で、作品に登場する刑事たちは、二人一組のいわゆるバディを組んで捜査にあたります。テレビドラマだったら『相棒』シリーズの水谷豊と寺脇康文、『あぶない刑事』の舘ひろしと柴田恭兵、映画で言ったら『セブン』のモーガン・フリーマンとブラット・ピットといったところでしょうか。あ、誰ですか？ジェネギャがヤバい！とか陰口を言っている人は？

『ストーンサークルの殺人』でも、警官のバディが活躍するのですが、その組み合わせがちょっと変わっています。

主人公のワシントン・ポーは、タフで正義感の強いベテラン刑事です。かつて、重大犯罪分析課（SCAS）の警部だったポーは、異常者によって女性が拉致され殺害されるという連続殺人事件の捜査中に、新たに誘拐された14歳の少女の家族に、議員の補佐官という立場に守られ、警察が手を出せないでいる容疑者の個人情報が記されたファイルを誤って渡してしまう、という重大なミスを犯します。少女の父親は容疑者を拷問し、監禁場所を聞きだして、少女の命は救われますが、容疑者は拷問の傷がもとで死亡します。ポーはその責任を問われ、停職処分となり、イギリス北西端、カンブリア地方にある人里離れた農場でひとり隠遁生活を送っています。

ある日、ポーの農場を、かつての部下で、現在はポーの後任としてSCASの警部の座にあるスティファニー・フリンが訪ねてきます。そのころカンブリア州では、「イモレーション・マン」による猟奇的な殺人事件が連続し、社会を騒然とさせていました。三名の被害者はいずれも、かつてケルト民族が宗教的な目的で築いたとされるストーンサークル（カンブリア地方に500箇所近くが存在）の内側で、燃焼促進剤を体に塗布されたうえ生きたまま火を付けられる、という残虐な方法で殺害されていました。このショッキングな事件の犯人に、マスコミが付けた名前がイモレーション・マンです。イモレーションとは、動物を焼き殺して神への供物として捧げることを意味します。フリンはポーに、警察に戻りイモレーション・マン事件の捜査にあたってほしいと伝えます。「なぜ俺に？」と尋ねたポーに、彼女が示した写真を見て、ポーは言葉を失います。その写真には、黒焦げになった三番目の犠牲者の遺体が写っていました。そしてその胸部には、「5 ワシントン・ポー」の文字が刻まれていたのです。フリンはポーに告げます。「あなたが5番目の被害者になるというのが私たちの見解」。

SCASに復帰したポーは、早速イモレーション・マンの事件のファイルを取り寄せ、捜査を開始します。犠牲者は、元新聞記者、農業経営者、地方議員の三人で、裕福な初老の男性という以外に共通点はなく、互いに面識があったかどうかも確認できていません。捜査を進めている最

中、カンブリア西部コッカーマスという小さな町で第四の犠牲者が発見された、との一報がもたらされます。ポーは現場に向かうにあたり、分析官一名を同行したいとフリンに要請します。「うちでいちばん優秀なのは誰だ？」という問いに、フリンはティリー・ブラッドショーの名前をあげ、「でも、ちょっと変わった子なの」と付け加えるのです。

ティリーは大学院を修了してSCASに所属したばかりの新米分析官です。16歳のとき最初の学位をオックスフォードで取得し、数学やコンピューターに関する修士号ひとつと博士号ふたつを持っています。IQが200を超える彼女は、11ヶ月と 14 日前に一度だけ目にした法律の条文を丸暗記することができる特別な頭脳の持ち主ですが、他者とのコミュニケーションは得意ではありません。まず、ティリーには冗談がまったく通じません。殺人事件の捜査に出かけることを、ポーが「カンブリアの春を満喫しに行くぞ」と冗談めかして言うと、グーグルで「カンブリアの春を満喫するために必要なもの」を検索し、テントや缶詰を持って行こうとする始末です。そんな彼女はSCASの中で、同じ分析官仲間からいじめを受けていました。そのことに気づいたポーは、ティリーを「ぼんくらちゃん」と馬鹿にして笑った分析官を椅子から引きずり落とし、壁に叩きつけると、「おれはワシントン・ポー部長刑事だ。いじめは絶対に容赦しないからよく覚えておけ」と宣言するのです。この一件は、ティリーの心中にポーに対する信頼を芽生えさせるきっかけとなります。

こうしてバディとなった「タフガイ」ポーと「不思議ちゃん」ティリーのコンビは、不毛の地カンブリアへと向かいます。人里離れたホテルの会議室に捜査本部を設置し、ポー、ティリー、フリン、そしてポーの旧友でもあるカンブリア州警察犯罪捜査課のキリアン・リードの４人がチームを組み、プロファイリング（犯人の行動やデータの分析から人物像を推定する手法）を開始します。そこで、最初の三人の被害者は本当に互いに面識がなかったのだろうか、とリードが提起した疑問に対し、ティリーは5分でプログラムを書き上げ、「カンブリア州で同じ社会グループに属する三人の成人男性が互いに面識がなかった確率は 3.6　パーセント」と解答して、皆をあ然とさせます。

ポーの刑事としての経験と勘、ティリーの神業のような分析力の融合は相乗効果を発揮し、二人は隠されていた事実を次々と明らかにしていきます。そしてついに、誰も想像だにしなかったイモレーション・マンの正体が、捜査線上に浮かび上がってくるのです。

いや～、おもしろかった。直球ど真ん中の本格ミステリーと言っていいと思います。特に最後の数十ページなどは息もつかせぬ展開で、あ～もうすぐ読み終わっちゃう、読み終わるのがもったいない！と感じながら読んでいました。にも関わらず、「よい子のみんな、ぜひ読んでみてね」と言いにくいのは、作品中に残酷でグロテスクな場面、ストーリーが少なからず登場してくるからです。もしかして読んでみたら「うげ！」となるかもしれません。ミステリーとして秀逸であることは保証します。グロ耐性がある人にのみお勧めします。

『われら闇より天を見る』　クリス・ウィタカー（ハヤカワ文庫）

物語の舞台は、カリフォルニアにある海沿いの小さな町、ケープ・ヘイヴン。少しずつ陸が海に浸食されている町で、ウォークは警察署長を務めています。署長とは言っても、ウォークの他には署員一名、非常勤の補助員一名がいるだけです。正義感が強く、弱い立場の人たちの味方となり、丸顔でぽっちゃりした体型のウォークは、人びとから信頼され親しまれています。

ケープ・ヘイヴンに住むウォークの友人の一人に、スター・ラドリーがいます。高校の同級生だ

ったスターは、当時から見るものの眼をひきつける美貌の持ち主でした。多くの男性とつき合いのあったスターには、ダッチェスとロビンという二人の子どもがいます。ただし姉と弟の父親は別別で、誰なのかもはっきりしていません。精神的に不安定で、ひとつの職業に就いて働くことができないスターは、バーやクラブで歌を歌ってわずかな収入を得ています。酒や薬物に溺れ、病院にかつぎ込まれることもたびたびのスターに、ウォークは何かにつけて力になろうとしますが、スターの生活は改善されません。

ダッチェスは、母そっくりの美貌を持つ 13 歳の少女です。その勝ち気な性格は「キレたら手が付けられない」と、周りの不良たちも一目おくほどです。子どもたちへの愛情はあるもののの、子どもたちを守ることはできないスターに代わり、ダッチェスは 5 歳の弟ロビンの母親の役割も果たしています。しかし、サンドイッチにかけるケチャップにも事欠くほどの貧しさの中で、ロビンに切ない思いをさせていることをダッチェスは苦しく感じています。ウォークはダッチェスにも支援の手を差しのべますが、ダッチェスは閉ざした心を開こうとはしません。

ダッチェスは「家系図」をつくる学校の課題をきっかけに、自分の祖先にビリー・ブルー・ラドリーというお尋ね者の無法者がいたことを知ります。このことはダッチェスにとって大きな誇りとなり、心の支えとなりました。ダッチェスは、以来自分を「無法者」と名乗るようになります。無法者ダッチェスは、母親に暴力をふるったディッキー・ダークへの復讐に、ダークの経営するナイトクラブに放火したうえ、火災保険の受け取りに必要な防犯カメラのビデオテープを持ち出します。以後、ダークはビデオテープを奪い返そうと、ダッチェスをつけ狙うことになります。

ヴィンセントは、やはりウォークとは高校の同級生で、変わらぬ友情を誓い合った親友です。高校時代、 15 歳のヴィンセントとスターは恋人同士でした。ある夜、無断で借りた父親の車でスターとドライブに出かけたヴィンセントは、海沿いの通りで、スターの 5 歳の妹を過って轢いて死亡させてしまいます。 10 年の刑期を課されたヴィンセントは、刑務所内のけんかで相手を死亡させ、さらに 20 年の刑期を過ごし、30 年ぶりにケープ・ヘイヴンに戻ってきました。ウォークは、スターにヴィンセントと会うことを提案しますが、スターは受け入れません。一方で、ディッキー・ダークがスターに暴力をふるおうとした際、ヴィンセントがダークを追い払った事件をきっかけに、ダッチェスはヴィンセントに信頼をいだくようになります。

ロビンの6歳の誕生日の前日の夜、母親の財布から抜き取ったなけなしの6ドルを手に、ダッチェスは自転車で町に向かいました。母親が忘れているに違いない弟の誕生日プレゼントを買うためです。駄菓子のようなケーキと安っぽいおもちゃを手に帰ってきたダッチェスは、自宅前に大勢の警察官やパトカー、野次馬が集まっている光景を目にします。

その少し前、銃声が聞こえたとの通報を受けスターの家に駆けつけたウォークは、大量の血を流して居間に倒れているスターを発見します。銃弾に胸を貫かれ、スターは死亡していました。その傍らには、うずくまるヴィンセントの姿がありました。ヴィンセントは両手を上に向けて抵抗する意志がないことを示し、ウォークに、自分に手錠をかけるよう告げます。まもなく駆けつけた警官隊によって規制線のテープがはりめぐらされ、彼らは、カギのかかった寝室の中にいたロビンを発見、救出します。警官たちの制止をふりきって居間に飛び込んだダッチェスが、変わり果てた母親と対面したのはその直後のことでした。

『われら闇より天を見る』は、単なるミステリーにとどまらない、重たく切ない人間ドラマです。原題の『 We begin at the end 』というタイトルは、「はずれくじを引いた子ども」として生まれてきたダ

ッチェスやロビン、運命に翻弄(ほんろう)され本来の自分と違う道に迷い込んだウォークやヴィンセントが、始まりからでなく、その結果、結末から人生を生き直そうとすることを意味しているのではないかな、と自分は勝手に解釈しました。

スターの命を奪った拳銃は、現場のどこからも発見されませんでした。また、銃を撃った際に残る硝煙反応もヴィンセントから検出されませんでした。にも関わらず、カリフォルニア州検事局はヴィンセントを殺人犯として立件する方針を決定します。その理由は、スターの殺害事件についてヴィンセントが無実の主張を一切せず、頑(かたく)なに黙秘をつらぬいていることです。ウォークは、もしも有罪判決が出たら死刑の可能性が高いことをヴィンセントに伝え、本当のことを話すよう説得します。しかしヴィンセントは、貝のように口を閉ざしたきりで何も語ろうとはしません。一方でウォークは、ダッチェスとロビンの姉弟を、ひそかにモンタナにあるスターの父親ハルが営む農場に避難させます。しかし、しだいにそこにもディッキー・ダークの影が見え隠れするようになります。「無法者」ダッチェスは弟を守るため、苦渋(くじゅう)の決断を迫られることになるのです。

幾多の人びとの人生をまきこんだ物語は、想像もしなかった結末を迎えます。読み終わった後、何ともいえない深い余韻(よいん)にひたる自分がいました。「もう一度読みたい、心にしみるミステリーランキング」があったとしたら、文句なしに上位に推すと思います。機会があったら、ぜひ読んでみてください。

＊＊＊

というわけで今回の校長室だよりは、久々に 10 ページ超えの大長編となってしまいました。校長室だよりですが、「内容はともかくとして、長くて読むのが大変」という感想をいただくことがあります。そこで最近では毎回 5 ～ 6 ページ以内、という目標を掲げて書くようにしています。今回 7 つの小説を選んだ時点で、「今回はちょっと長くなっちゃうかもね～」と思っていましたが、 3 番目の『ハヤブサ消防団』のあたりで「これはマジでヤバいかもしれない」と思い始め、『クスノキの番人』あたりでは「ヤバい、終わらない、どうしよう！」とプチパニックになり、最後は「ええい、なるようになれ！」と開き直って書き上げました。まあ、趣味の方向に全力疾走しちゃうとこうなるよね、というのが今回の反省です。

長いといえば、今回紹介したミステリー小説は、短い作品で文庫本 500 ページ弱、長い作品だと 700 ページ近くあります。昨今何かと長いもの、時間のかかるものが敬遠される風潮があるようです。「タイパ」などという言葉が生まれ、SNSではショート動画がバズり、映画を早送りで見るのも一般化しているなどと聞くと、テレビの何とかロードショーで映画を観ていた世代としてはびっくりしてしまいます。

もちろん無駄に冗長(じょうちょう)なのはダメだと思いますが、例えば 500 ページ超の良質なミステリーをじっくり腰を据えて読むおもしろさは、ショート動画で得られるおもしろさとはまったく質が異なります。そんな「じっくり型」のエンタメが廃(すた)れていくのはもったいないし、なにより生徒諸君をはじめとする若い人たちが、こうしたおもしろさを味わう経験がないまま大人になるとしたら、ちょっと損してないかい？（北海道弁）と常々感じていたことが、今回の校長室だよりを書く動機のひとつになりました。

季節は少しずつ秋から冬に向かっています。秋の夜長、一日くらいスマホの電源を切り、ホットココアなど飲みながらミステリーの世界にひたってみるのはどうでしょう？（終）

※「校長室だより」は、本校のＨＰにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、ＨＰの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。